

## ぼくが捕ってあげるよ！

刈谷市立かりがね保育園(愛知県刈谷市)

[4歳児]

ねらい：セミ捕りを通じて、友達とのかかわりを深める。

場面：園庭で保育者にセミを捕ってもらう子どもたち。セミを手にする、子どもたちは嬉しそうに飼育ケースに入れて見ている。しかし、セミを多く集めたがったり、セミがよく鳴くように飼育ケースを縦横に振って鳴かせたりし、セミの取り合いが多くトラブルになっている。

<7月28日>

(10:15) 今にも握りつぶしそうにセミを持ったり、ケースに手を突っ込んでセミを取り合ったりしている姿を見た5歳児が「そんなんじゃ羽が破れてかわいそうだよ。こうやって優しく持ってあげるんだよ」と親指と人差し指で羽を軽く押さえるように持って見せてくれる。また、他児は指の間にセミを2・3匹挟んで見せ「セミ捕り名人はこうやって持つんだよ」と、得意そうにする。T児やH児をはじめ、4歳児の子どもたちは5歳児の姿にじっと見入っている。

その後、部屋に帰ってから5歳児が「貸してあげる」と、クラスまでセミ捕り名人の本を届けてくれる。早速読んだその本には、セミの持ち方、たもの使い方、セミの種類などが載っている。そして指に4匹もセミを挟んで持つセミ捕り名人のことが書いてある。読み終わると「先生、おやつ食べたら外行こう。セミ捕りに行こう」と、興奮して話しながら手をぎゅっと胸の前で握るT児や、「本と同じことを私も知っているよ」と顔を近づけて話してくるS児やN児がいる。

(16:00) 外では耳が痛くなるほどセミが鳴いている。子どもたちは大小の飼育ケースを片手に靴を履きながらも目はもう外の木を見ている。園庭に4歳児が一番に出て行ったこともあり、「先生すぐそこにいる」「捕って捕ってよ」と、セミに負けないくらい大きな声で叫んでいる。少し手を伸ばしたら届きそうな場所にセミがたくさんとまっている。これまでの様子を見ていてもたもを使いこなせず、振り回すだけの姿があったので、近くにいたT児に「手で捕れそう？」と聞くと「うん」と頷く。試しにT児の両脇を抱えて抱き上げ、T児が自分でセミが捕れるように近づける。すると見事に手中につかんだT児。大喜びで飛び跳ね、自分が捕ったセミを周りの友達に見せた後、捕ったセミのお腹側をまじまじと見ている。そんなT児をあこがれのような眼差しで見ている子や「今度は僕も」と、早く捕りたくて待ちきれない子がいる。同じようにやって捕れた子は2・3人で、あとの子は逃がしてしまったり「やっぱり怖い」と手が出せずにいたりする。T児が「これは鳴いてるからオスだよ」と、本で得た知識を確認するように保育者に聞き「そうだね、よく分かったね」と保育者が話すと、「だってオスが鳴くって書いてあったもん」と、満面の笑みで言いながらまたセミを見ている。そんなT児の周りを3・4人の子どもたちが囲い、「これはアブラゼミだよ」「だって茶色いもん」などと言いながら、これまでになくセミの様子をのぞき込んで見ている姿がある。

<7月29日>

(9:30) 「先生セミ捕りに行くよ」と、昨日に続き足早に園庭に駆けていく子どもたち。しかし、手で捕まえられるのはT児・H児・S児の3人で「やっぱり手で捕まえるのは難しかったかな」と保育者が考えていると、「捕って欲しい」と順番を待っていたR児のそばで「R児ちゃんに僕が捕ってあげるよ」と、T児の声が聞こえる。思ってもみなかった



T児からの提示に「よし、じゃ頼んだよ」と言いながらT児を抱えセミを捕まえられるようにすると、捕まえたセミをR児に渡す。「ありがとう」と嬉しそうにR児。「Tくん優しいね、なんかセミ捕り名人みたいでかっこいいな」と、保育者が言うと、よほど嬉しかったのかT児は「僕、セミ捕り名人みたい？」と何度も保育者に確認するように聞いてきたり、「僕、セミ捕り名人？」と、友達に聞いて回る姿がある。その後はセミを捕れない友達がいると「僕が捕ってあげる」と、すぐに捕って渡したりするようになる。また「こうやって持つといいんだよ」と、持ち方をやって見せるなどT児から友達にかかわっていく姿も見られる。

<その後>「Tくん、セミ捕って」「セミ捕り名人お願い」と、子どもたちがT児を頼り、またT児もとても嬉しそうに応じている姿を見るようになる。また、「ぼくセミ捕り名人なんだよ」と家でも嬉しそうに話していると母親からも聞き、降園後や休みの日には公園に出かけるようになったと聞く。

### 【考察・反省】

- ・セミを捕って子どもたちに渡してしまっていた自分の反省から、まずセミを子どもたちで見つけること、そして、保育者が手伝いながらも子どもたちでどうにか捕まえられないかと考えていた。それは、捕ってもらうことだけでは満足感が感じられずにいる姿やセミの乱暴な扱い方から感じていた。高い所でも何か台のようなものを使って自分なりに捕まえられる方法を考えたり工夫したりできるようなきっかけを与えたり、環境と一緒に用意したりするとよかったと反省する。そんな中、 のように5歳児が声をかけて手本を示してくれたことや、 のように本を紹介して新しい魅力や関心をもたせてくれたことで、新たにやる気が高まったのだと や の姿から考えられる。保育者からの発信や提案だけでなく、保育園という異年齢の集団ならではのかわりがセミ捕りという夏の日常的な遊びの中であったことは、子どもたちの中でとても刺激になり、 のように知ったことを確認したり、友達と話したりするきっかけになったのだと考える。
- ・T児がセミを上手にもつだけでなく、捕まえられることから「セミ捕り名人」と友達からも言われるようになった。そのきっかけは保育者が のように言ってしまったことからだったが、 の姿から魅力ある言葉の大切さや子どもへの影響力を改めて感じさせられた。そして、たまたま のようにしたことによって友達から喜ばれたり、 のように認められたことで自分が友達にしてあげられる嬉しさや満足感を感じ、自信につながった。このことは、友達へのやさしさやかかわりの深まりにも表れた。
- ・5歳児が本を紹介してくれるなど、4歳児だけではできない刺激を受け新たな学びを体験できた。しかし、「ありがとう」などの感謝の気持ちは自然に子どもたちから出てくることはなく、ここは保育者からの援助が必要だったと反省する。嬉しさや感謝の気持ちを「ありがとう」「嬉しかった」の言葉にして相手に伝える大切さを丁寧に知らせていきたい。

### みどころ

セミは“夏”という季節を感じることでできる、幼児にとって身近な虫です。4歳児でもよく知っている興味を引く虫なので、5歳児の刺激や保育者の援助を受けることで、事例のように進んでかわる姿が引き出されます。こうしてかわりながら、セミのを感じたり知ったりして、自分たちが望ましいと思うかわり方も獲得していくことで、「科学する心」が育まれることが期待できます。